

幼児期の子どもを持つ父親の養育尺度作成の検討

Development and Evaluation of a Child Rearing Scale for Fathers of Infant Children

前原 敬子¹⁾
Keiko Maehara

日高 朱里¹⁾
Akari Hidaka

椎葉 美千代¹⁾
Michiyo Shiiba

藤田 美貴¹⁾
Miki Fujita

【要旨】

目的：幼児期の子どもを持つ父親の養育尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。

方法：Baumrind が親の行動の軸となる要素とした「応答性」と「統制性」をもとに、子どもに関する調査などの資料を参考にしながら、幼児を持つ父親が日ごろ行っている養育行動・意識について質問内容を作成した。この質問内容について、対象の児を持つ父親 10 名に面接調査を実施し、さらに、母親との面接を通して、それら質問内容が日ごろ父親のとり行動内容を示すものとして適しているかを確認した。これにより、養育行動 15 項目、養育意識 13 項目の計 28 項目の養育項目の質問紙を作成し、承諾の得られた幼稚園・保育園にて質問調査を実施し、内的整合性と構成概念の妥当性を検討した。

結果：質問紙の回収数は 129(回収率 18.1%)で、有効回答数は 122(有効回答率 94.5%)であった。因子分析及び信頼性と妥当性の検討の結果、父親の養育行動第 1 因子は「社会性を促す行動」、第 2 因子は「子どもへ関わる行動」の 2 因子 8 項目であった。父親の養育意識第 1 因子は「子どもへの関わりを促す意識」、第 2 因子は「社会性を促す意識」、第 3 因子は「家族生活を促す意識」の 3 因子 10 項目で構成された。基準関連尺度との相関、モデルの適合性が確認され妥当性が確保された。Cronbach の α 係数は 0.753 から 0.882 で内的一貫性が確認された。

結論：作成した幼児期の子どもを持つ父親の養育尺度の信頼性と妥当性は確保できた。

キーワード：父親の養育、幼児期の子ども、尺度

Abstract

Purpose: To develop a child rearing scale for fathers having infant children and to examine its reliability and validity.

Method: Based on “responsiveness” and “controllability”, which Baumrind identified as the core elements of parental behavior, this study developed questions about the daily child rearing behaviors and consciousness of fathers of infant children, referring to data such as surveys on children. Ten fathers were interviewed in order to check the validity of these questions, and through interviews with the mothers, it was confirmed whether the questions were appropriate for describing the behavior of fathers on a daily basis. We developed a questionnaire with 28 child-rearing (15 items for child-rearing behavior and 13 items for child-rearing consciousness), and conducted questionnaire surveys at kindergartens and day-care centers that had given their consent to examine the internal consistency and validity of the constructs.

Results: The number of answers collected was 129 (18.1 % of collection rate), and the number of valid answers was 122 (94.5 % of valid answer rate). The results of factor analysis and examination of reliability

1) 帝京大学福岡医療技術学部 看護学科 Faculty of Fukuoka Medical Technology Teikyo University
(受付日: 2020.12.11, 受理日: 2021.1.18)

and validity showed that the first factor in fathers' child raising behavior was "behavior that promotes sociability" and the second factor was "behavior that shows involvement with children". These two factors consisted of eight items. The fathers' consciousness of child-rearing consisted of ten items which were classified into the following three factors: "consciousness of promoting involvement with children," "consciousness of promoting sociability," and "consciousness of promoting family life". Correlations with criterion-related scales and the compatibility of the model were confirmed and its validity was ensured. Cronbach's α coefficient ranged from 0.753 to 0.882, indicating its internal consistency.

Conclusion: The reliability and validity of the child-rearing scale for fathers with infant children which this study developed were ensured.

Key words: child rearing by father, infant child, scale

I 緒言

我が国における親子関係に関する研究は、子育てはその適性を有する母親が行うべきとする性別役割分業の影響から、母子関係に焦点が当てられ¹⁾、父親を親子関係の対象として取り上げた研究は少ない。父親研究については、1999年に男女共同参画基本法が成立され、2000年以降は少子化対策に父親の家事育児参加が推進されるようになり、それに伴い父親の家事育児参加をとらえた研究課題が増加した。これまで男性は社会人、職業人として成人期の発達としてとらえることが多く、子育てをする父親、父親の養育をとらえた研究は少ない。

特に、就学前の幼児期の子どもは物事に対する概念化が進み、物事を関連付けたりすることが進歩し、両親や兄弟との結びつき、善悪の区別の学習を発達させるなど、身体の成熟に加え、重要他者を持つ人々を通して発達する時期²⁾である。その達成には、将来にわたる人格形成に影響し、精神的発達、社会生活、道徳的性格の構造の基盤になっている。この時期の子どもに対する父親の養育は、時間的な関わりと共に質的な関わりが必要になってくる時期であり、父親の養育のあり方は、家庭における父親の役割を考える上で重要であり、就学前の幼児期の子どもを持つ父親の養育に着目した。

家族内での役割機能について、社会学者

Parsons³⁾は、父親は「道具的役割」母親は「情緒的役割」を担うと当てはめ考えている。一方、柏木⁴⁾は育児技術の習得、子どもを愛おしいと思う気持ちの養育行動や子どもに対する感情は、生物学的な性で規定されるものではないと述べ親になることは男性も女性も同じであり、近年は親性という言葉が使用されるようになってきた。このように、父親と母親の養育を同時にとらえ親性の発達とする尺度の開発が多くみられ、父親母親の区別なく使用され、親の養育や親としての役割変化に影響を与える要因を明らかにしている⁵⁾⁶⁾。我が国においては、父親のみを対象とした面接調査や質問紙調査から尺度を作成されたものは少なく、父親の語りや記述がどの程度反映されているのかは明確にされていない。これでは父親の独自性は十分に語られず、父親を対象とした個別面接や質問紙調査を行い検討する必要がある⁷⁾という指摘がある。幼児期の子どもを持つ父親の養育行動を明らかにするには、父親の独自性を明らかにすべく、尺度の作成が必要であると考えた。

親の養育について Baumrind⁸⁾は親の養育行動を「応答性」と「統制性」の側面から親の行動を検討し、「応答性」と「統制性」の高い権威的な親に育てられた子どもは、学習や社会的な能力が高いと言われている。平田⁷⁾は、Baumrindの「応答性」と「統制性」を軸に、青年期の「関

わり行動・意識」尺度を作成し、父親の養育行動を明らかにした結果、青年期の父親の養育には夫婦の連携が必要であり、父親自身の意識を高めることを明らかにしている。

そこで、本研究では就学前の幼児期の子どもを持つ父親の養育を Baumrind の「応答性」と「統制性」を軸として父親の養育尺度の作成を行い、信頼性と妥当性の検討を目的とした。

II 研究方法

研究の流れは図 1 に示す。

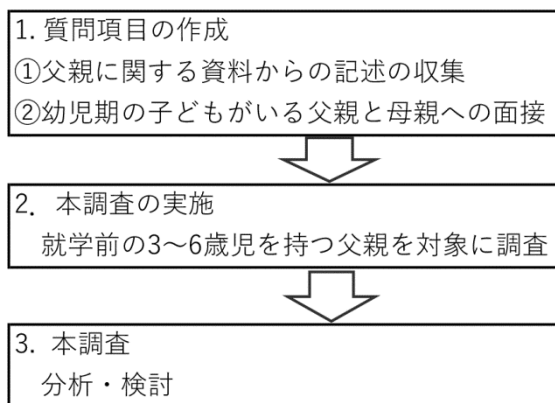


図1. 本研究の流れ

1. 用語の定義

1) 父親の養育：父親の子どもへの関わりを養育として捉え、養育には行動と意識が内在し、養育を構成するものとして Baumrind の「統制性」と「応答性」を用いた。「統制性」は子どもの意思とは関係なく父親が子どもにとってよいと思う行動、それを強制する行動と意識。「応答性」は父親と子どものコミュニケーションと関わりからなり、子どもの意図・要求に気づき、子どもの意図をできる限り充足させようとする行動と意識とした。

2) 幼児：一般的には1歳～6歳の就学前の子どもを幼児とされているが、本研究で取り扱う幼児を3～6歳の就学前の子どもと定義した。

2. 調査対象

3～6歳の就学前の子どもを持つ父親とした。

3. 調査期間

2015年10月～2016年2月

4. 質問項目の作成

作成に当たって、平田⁹⁾が作成した青年期の関わり行動尺度・意識尺度を開発者の助言のもと、幼児をもつ父親が日頃行っている養育行動・意識を子どもに関する調査や新聞記事などの資料を参考に内容を作成した。これを3～6歳の就学前の子どもを持つ父親10名に面接調査を行い養育行動の内容を検討してもらった。母親2名については、日ごろ父親がとっている行動内容として適しているのかを面接を通して検討した。さらに対象の子どもを持つ看護系大学院卒の父親2名に面接を実施し内容が妥当であるのか、追加するもの、質問内容が答えにくいものはないかを検討し、質問項目を抽出した。これより、養育行動15項目、養育意識13項目の28項目の養育行動・養育意識尺度を作成した。評価は6段階評価で点数が高いほど養育行動・意識が高いことを示す。

5. 本調査

1) 対象者

A 市内の幼稚園・保育園に質問紙調査の実施と研究協力を依頼し、承諾の得られた幼稚園・保育園を対象とした。対象者は園に通う3～6歳の就学前の子どもを持つ父親で、研究参加に同意が得られた者とした。

2) 調査内容

対象者の属性として、年齢・職業・学歴・労働時間・妻の年齢・対象の子どもの出生順位、子どもの性別、家族構成を聞いた。親役割受容観尺度、夫婦関係満足感尺度、性役割観尺度を設定して回答を求めた。

3) データ収集方法

無記名による自記式質問紙調査で、承諾の得られた幼稚園・保育園の保育士より対象者への配布を依頼した。回収は同封した返信用封筒による郵送法とした。

4) データ分析方法

(1) 因子分析の検討

父親の養育行動・養育意識の因子構造をみるため探索的因子分析を行い、因子負荷量 0.4 未満であった項目を除外した。項目を除外するたびに因子分析を繰り返した。抽出された因子構造について、研究者らでその内容を解釈し因子を命名した。

(2) 信頼性係数の確認

尺度の Cronbach の α 係数を算出し確認した。

(3) 妥当性の検討

妥当性の検討は、基準関連妥当性と構成概念妥当性により検討した。

基準関連妥当性は、外的基準尺度との関連性を検討した。外的基準尺度は「親役割受容観」尺度との関連を見た。「親役割受容観」尺度は「肯定的」「否定的」の 2 因子 12 項目からなり、親としての役割受容観をみる評価基準である。この尺度は母親に対して用いたものであったが、父親として使用できることを著者¹⁾に承諾を得た。父親の養育行動は父親が子どもへの関わりを通して、親役割を肯定的に受容すると考え、父親が親としての役割の具体的行動であり、この 2 つの尺度は類似するものと判断し、外的基準尺度として使用し相関があるかを確認した。

構成概念妥当性については、因子分析を行い構成概念と合っているのかを調べた。因子分析の結果、モデルの適合度を確認しながら、因子負荷量の小さい項目を除外した。除外した項目より再度、因子分析を繰り返しモデルの適合度を確認した。以上、外的基準尺度との相関と因子分析によるモデル適合度を確認した 2 項目で妥当性の検討をおこなった。

データの集計・Pearson の順位相関係数、因子分析には SPSS ver.24 を用い、モデルの適合度は Amos ver.25 を使用し検討した。検定の統計学的有意水準は 5 % とした。

6. 倫理的配慮

本研究は、帝京大学福岡医療技術学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(帝福倫 15-15)。

研究の同意が得られた幼稚園・保育園に調査用紙の配布依頼を行い、対象者には研究への協力は自由意思であり、同意書と質問紙は同定できないように保存しプライバシーは保護されることを依頼文に記載し、質問紙に回答・郵送法により返信してもらった。

III 結果

1. 調査票の回収結果

A 市の幼稚園・保育園 15 施設を通して、710 名に質問紙を配布した。回収は 129 名(回収率 18.1%)で、欠損値の著しいもの、子どもが就学しているもの 7 名を除く 122 名(有効回答率 94.5%)を分析対象とした。

2. 対象者の属性

対象者の平均年齢は 38.6 歳(SD±5.85)であった。職業は会社員が最も多く 88 名(72.1%)であった。妻の平均年齢は 36.7 歳(SD±4.77)であり、子どもの出生順位は第 1 子 66 名(54.1%)で最も多く、子どもの性別は男児 71 名(58.2%)、女児 51 名(41.8%)であった(表 1)。

表1. 父親の属性			n=122	
	平均	SD	人数	%
年齢	38.6	5.85	122	
職業				
公務員			14	11.5
会社員			88	72.1
自営業			16	13.1
その他			4	3.3
妻の年齢	36.7	4.77	121	
子どもの出生順位			122	
第1子			66	54.1
第2子			36	29.5
第3子			16	13.1
第4子			4	3.3
子どもの性別			122	
男			71	58.2
女			51	41.8

3. 父親の養育尺度の構成項目

28 項目の養育行動 15 項目、養育意識 13 項目について行動・意識それぞれに因子分析(主因子法、プロマックス回転)を実施、因子負荷量 0.4 未満であった項目を順次削除し、再度因子分析を繰り返した。スクリープロットからも因子数を決定した。結果、養育行動に 3 因子、養育意識に 3 因子が抽出されたが、養育行動因子のモデル適合度を確認したところモデル適合度が悪く、さらに因子負荷量 0.45 以下の項目を削除し、確認的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。養育行動の「応答性」と「統制性」の 2 側面と考えると因子数を 2 として固定した。その結果、養育行動は 2 因子構造でモデル適合度が確認された。養育行動因子は、2 因子下位項目 8 項目が抽出され、累積寄与率は 47.616% であった。養育行動第 1 因子と第 2 因子の因子間相関は有意な正の相関($r=0.451, p<0.01$)がみられた (表 2)。

養育意識においても因子負荷量を養育行動と同様に 0.45 以下の項目を削除し、因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、3 因子構造でモデル適合度が確認された。養育意識は 3 因子で下位項目 10 項目が抽出され、累積寄与率は 69.108% で、各因子間の相関は第 1 因子と第 2 因子で相関($r=0.440, p<0.01$)がみられ、第 1 因子と第 3 因子で相関($r=0.571, p<0.01$)、第 2 因子と第 3 因子で相関($r=0.417, p<0.01$)がみられた(表 3)。

以下に各々、養育行動 2 因子と養育意識 3 因子の下位項目の内容を示した。

養育行動第 1 因子は、「挨拶などの基本的生活習慣を守らせる」「子どもに社会の規範(道德感、お金の価値など)を守らせる」等であった。これは、基本的な生活習慣、社会の規範を形成する行動で統制性の側面であり【社会性を促す行動】と命名した。

養育行動第 2 因子は、「子どもと一緒にボール

遊び、ブランコ遊び、砂遊びなどで外で遊ぶ」「子どもと一緒に(買い物・食事・散歩など)に出かける」等であった。これらは子どもと共に遊びコミュニケーションをとる応答性の行動であり【子どもへ関わる行動】と命名した。

養育意識第 1 因子は、「子どもと一緒に室内で遊びたい」「子どもと一緒に外で遊びたい」と子どもに関わりコミュニケーションを図りたいという応答性の側面であり【子どもへの関わりを促す意識】と命名した。

養育意識第 2 因子は、「子どもに挨拶などの礼儀を教えたい」「子どもに社会の規範(道德観、お金の価値など)を教えたい」等、子どもに対してのしつけや社会規範などの統制性の側面であり【社会性を促す意識】と命名した。

養育意識第 3 因子は、「家族との団らんの時を持ちたい」「妻が回り(家族・親戚)などとうまくいくように働きかけたい」等、家族との関わりを促す項目で【家族生活を促す意識】と命名した。

4. 信頼性係数の結果

養育行動尺度全体の Cronbach の α 係数は、0.807 で信頼性を示した。因子別にみると第 1 因子 0.781、第 2 因子 0.753 であった(表 2)。

養育意識尺度全体の Cronbach の α 係数は、0.888 で信頼性を示した。因子別にみると第 1 因子 0.876、第 2 因子 0.882、第 3 因子 0.842 であった(表 3)。

表2. 父親の養育行動因子分析と因子間相関

質問項目	因子		α 係数
	第1因子	第2因子	
第1因子：社会性を促す行動（ $\alpha=0.781$ ）			
挨拶などの基本的生活習慣を守らせる	0.760	0.027	0.81
子どもに社会の規範(道德観、お金の価値など)を守らせる	0.690	-0.077	
家庭でのルール(起床時間、就寝時間)を守らせる	0.687	-0.061	
子どもが悪いことをした時は叱り、よい事をした時はほめる	0.653	0.153	
第2因子：子どもへ関わる行動（ $\alpha=0.753$ ）			
子どもと一緒にボール遊び、ブランコ遊び、砂遊びなど外で遊ぶ	-0.077	0.739	0.81
子どもと一緒に(買い物、食事、散歩など)に出かける	0.076	0.727	
子どもと一緒にテレビのアニメを見たり、ゲームをしたり、絵本を読んだり室内で遊ぶ	-0.014	0.639	
子どもを一人の人間として対等に扱う	0.002	0.558	
因子相関	第1因子	1.000	
	第2因子	0.451	
因子寄与率(%)	37.883	9.732	
累積寄与率(%)	37.883	47.616	
最尤法、プロマックス回転			

表3. 父親の養育意識因子分析と因子間相関

質問項目	因子			α 係数
	第1因子	第2因子	第3因子	
第1因子：子どもへの関わりを促す意識（ $\alpha=0.876$ ）				
子どもと一緒に室内で遊びたい	0.899	-0.053	-0.031	
子どもと一緒に外で遊びたい	0.834	0.084	-0.093	
子どもと一緒にお風呂に入りたい	0.722	0.046	0.084	
子どもと一緒に買い物、散歩などに出かけたい	0.644	-0.041	0.177	
第2因子：社会性を促す意識（ $\alpha=0.882$ ）				
子どもに挨拶などの礼儀を教えたい	-0.142	0.992	0.099	0.89
子どもに社会規範(道徳観、お金の価値など)を教えたい	0.096	0.856	-0.039	
しつけについては毅然とした態度で接したい	0.088	0.718	-0.097	
第3因子：家族生活を促す意識（ $\alpha=0.842$ ）				
家族と団らんの時を持ちたい	0.009	0.019	0.880	
妻がまわり(家族、親戚など)とうまくいくように働きかけたい	-0.04	-0.074	0.782	
子どもの興味・関心を知りたい	0.120	0.050	0.742	
	第1因子	1.000		
因子相関	第2因子	0.440	1.000	
	第3因子	0.571	0.417	
因子寄与率(%)	40.581	20.57	7.957	
累積寄与率(%)	40.581	61.151	69.108	
最尤法, プロマックス回転				

5. 妥当性の結果

1) 基準関連妥当性

父親の養育行動尺度、養育意識尺度と親役割受容観尺度(肯定的・否定的)との関係を Pearson の相関係数で確認した結果、養育行動尺度と親役割肯定感尺度($r = 0.374$, $p < 0.01$)、養育意識尺度と親役割肯定感尺度($r = 0.454$, $p < 0.01$)で正の相関があった。養育行動尺度と親役割否定感尺度($r = -0.211$, $p < 0.05$)、養育意識尺度と親役割否定感尺度($r = -0.29$, $p < 0.01$)は負の相関であった(表 4)。

2) 構成概念妥当性

養育行動 2 因子 8 項目のモデル適合性は、 $GFI=0.9$ 、 $AGFI=0.939$ 、 $CFI=0.945$ 、 $RMSEA=0.000$ であり、モデルの適合性が確認できた。

養育意識 3 因子 10 項目のモデル適合性は、 $GFI=0.9$ 、 $AGFI=0.902$ 、 $CFI=0.993$ 、 $RMSEA=0.037$ であり、モデルの適合性が確認できた。

表4. 基準関連妥当性

	父親の養育行動尺度8項目	父親の養育意識尺度10項目
親役割肯定感尺度6項目	$r = 0.374^{**}$	$r = 0.454^{**}$
親役割否定感尺度6項目	$r = -0.211^{*}$	$r = -0.290^{**}$
$r = \text{Pearson}$		$* p < 0.05, ** p < 0.01$

IV 考察

1. 尺度の因子構造

養育行動の因子構造は、2 因子で下位項目 8 項目となった。最初の因子分析では 3 因子構造となったが、負荷量の低いものを削除し、モデルの適合性を確認し再度因子分析を行い、2 因子構造となった。養育行動の第 1 因子が「社会性を促す行動」となったことから、幼児を持つ父親が子どもに基本的な社会生活を促す、社会規範・家庭の中での基本的なルールを守らせるなど、「統制性」の側面の養育行動をとっている事がわかった。父親の関わりは子どもの社会性の発達に影響を与え¹⁰⁾、日本の男性は社会により強く関わることを父親としての役割として認識している¹¹⁾ことが明らかになっている。本研究の就学前の幼児を持つ父親からも、「社会性を促す行動」が主因子となったことから幼児を持つ父親の養育行動はしつけなどを教示する行

動であり、父親の役割として行動している事が考えられた。養育行動の第 2 因子は、「子どもへ関わる行動」で、子どもと一緒に遊ぶ、買い物・食事・散歩に出かけるなど、応答性の側面である。父親が子どもと一緒に遊び、接近することは養育行動を促す上で重要である。児と接する時間が長い程、その中で児から何らかの反応が返ってくる過程を繰り返し父親自身が関わり方への満足感や充実感を得ることで児への愛情、親意識を高める¹²⁾ことが明らかにされている。「応答性」の側面の養育行動は、親としての意識を高める行動であり子どもとの関わりを促す行動である。

養育意識の因子構造は 3 因子で下位項目 10 項目となった。養育意識第 1 因子は「子どもへの関わりを促す意識」で応答性の側面であり、養育意識の第 1 因子となった。養育行動では、

「応答性」の側面は第2因子であったが養育意識では第1因子となっている。これが主因子となったことは、子どもと一緒に遊びたいという意識はあるが、実際は直接的な関わりが少ない事が予想された。養育意識第2因子は、「社会性を促す意識」であり、父親は子どもと共働作的な応答性の関わりを意識しているが、実際は養育行動の第1因子に見られるように子どもに対するしつけなど基本的な生活習慣や社会規範を教示する「統制性」の行動を役割としていることがわかる。養育意識の第3因子は、養育行動には抽出されなかった「家族生活を促す意識」であった。子どもの養育を通して、一家を支える上での家族の団らん、妻や子どもとのコミュニケーションである。養育意識第1因子「子どもへの関わりを促す」との相関が高かったことから「応答性」の側面と考えられる。男性の親になる実感は、分娩を体験する女性と違い、妻より低いまま親になっていく。父親は一家を支え父親になることを成長の機会としてとらえ、親役割の適応に影響を及ぼす¹²⁾とされている。養育意識の第3因子でこの因子が抽出されたことは、父親の意識の中に、家族に対する責任感から、父親としての役割適応を応答性の側面から促したいことが考えられた。また、養育行動には家族を守るという内容の養育行動が抽出されなかったが、父親の意識で抽出されたことは家族を守るという養育行動が含まれるのではないかと推測された。筆者¹⁴⁾らの学童期後期の子どもに対する父親の関わりを行動と意識で父親のタイプを類型化した研究では、関わり行動と意識の高い群の父親において父親自身の成長・発達を促していることが確認されている。幼児期の子どもを持つ父親においても、養育を促すことは父親の親としての成長につながると考える。

Baumrind⁸⁾は、「統制性」の養育行動を父親が担うには、「応答性」の養育行動と共にバランスよくとることが必要であるとしている。本研究

において幼児期の子どもを持つ父親の養育行動は「統制性」の側面が主因子となったこと、養育意識においては「応答性」の側面が主因子となったことを考えるとこのバランスの取れた養育を幼児期の子どもを持つ父親に対して促せるような支援の必要性が考えられた。

2. 信頼性の確認

開発した尺度が信頼性のある尺度であるかを確認すると、養育行動尺度全体、第1因子・2因子、養育意識尺度全体、第1因子・2因子・3因子のすべての因子において、0.7～0.8の信頼性係数が確認できた。各尺度で0.7以上が確認され信頼性のある尺度と判断でき、内的一貫性が確認された。

3. 尺度の妥当性

尺度の妥当性は、基準関連妥当性と構成概念妥当性で確認した。

基準関連妥当性については、外的基準尺度との関連を調べた。父親の養育と親役割受容感(肯定的・否定的)尺度には相関が確認された。先行研究より、父親の養育は父親としての役割を受け入れること¹²⁾が明らかにされている。この親役割受容観と父親の養育は関連があると考えられる。特に、肯定的親役割受容との関連が、相関係数0.4前後であったことは父親の養育行動・意識共に測定できる尺度である事を示している。

構成概念妥当性は、確認的因子分析を行い、モデルの適合度は、養育行動・養育意識共に良好であった。これより養育行動、養育意識尺度の一定の構成概念妥当性が確保されたと考える。

V 結語

本研究の目的は、幼児期の子どもを持つ父親の養育尺度の作成と検討を目的とした。尺度作成の過程における因子分析の結果、養育行動第1因子は「社会性を促す行動」因子、第2因子は「子どもへ関わる行動」因子、養育意識の第

1 因子は「子どもへの関わりを促す意識」因子、第 2 因子は「社会性を促す意識」因子、第 3 因子は「家族生活を促す意識」因子とした。この尺度は信頼性、妥当性のある尺度であることが確認された。

本研究は、就学前の幼児期の子どもを持つ父親に対して養育を測るツールとして、また、父親に対する子育て支援対策の一助になると考える。

VI 研究の限界と今後の課題

本研究は、限定した地域において質問紙調査を実施しており、回収率が低く結果を一般化するには限界がある。今後は、質問紙調査にあたっての説明依頼の仕方、回収方法を含めて検討していきたい。また、分析対象数が 122 と少なく、尺度を開発するにおいては数を増やして精選していく必要がある。

(謝辞：本研究にご協力いただきました A 市内の保育園・幼稚園の園長先生、保育士の方々、質問紙調査に快く協力をいただいたお父様方に感謝申し上げます)

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

引用文献

- 1) 大日向雅美：母性の研究。川島書店。1998.
- 2) 舟島なをみ：看護のための人間発達学。医学書院。2013.
- 3) Parsons, T. & Bales, R. : Socialization and interaction process. 橋爪貞雄他(訳) 核家族と子どもの社会化。黎明書房。1956.
- 4) 柏木恵子編：父親になる，父親をする。岩波書店。2011.
- 5) 及川裕子：親性の発達尺度の作成を試みて。日本ウーマンヘルス学会誌。4 巻，93-102，2005.
- 6) 大橋幸美，浅野みどり：育児期の親性尺度の開発－信頼性と妥当性の検討。日本看護研究学会雑誌。33(5)，45-53，2010.
- 7) 森下葉子：父親になることによる発達とそれに関わる要因。発達心理学研究。17(2)，182-192，2006.
- 8) Baumrind D. : Parenting Style & Adolescent Outcomes. Journal of Early Adolescence. 11(1)，56-95，1991.
- 9) 平田裕美：父親の青年への関わり行動尺度の作成及び信頼性，妥当性の検討－青年前期の子どもを持つ父親を中心として。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科「人間文化論叢」。3 巻，293－301，2001.
- 10) 加藤邦子，石井クンツ昌子：父親の育児かわり及び母親の育児不安が 3 歳児の社会性に及ぼす影響－社会的背景の異なる 2 つのコホート比較から。発達心理学研究。13(2)，30-41。2002.
- 11) 小野寺敦子：親になることによる自己概念の変化。発達心理学研究。14(2)，180-190，2003.
- 12) 森永裕美子，難波峰子，二宮一枝：育児期における父親の親性と母親の育児負担感に関する研究。小児保健研究，74(4)，519-526，2015.
- 13) 佐々木裕子：はじめて親になる男性の父親役割適応に影響する要因。母性衛生，50(2)，413-421，2009.
- 14) 前原敬子，齋藤ひさ子：学童期後期の子どもへの父親の関わり類型と発達との関連。母性衛生。53(1)，116-124，2012.